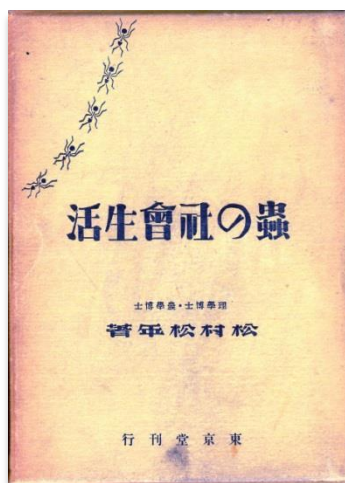




鹿沼の自然・栃木の旅

月報第35号

(2015年7・8月)



著者はこの進化し行く生物界に、社会生活をなす昆虫が最も高級の地位を占め、孤独生活をなすものが最も低級の地位に置かれるのを見るのである。人間の社会にありても、孤独生活をなすものと、団体的の生活をなすものとの間には多大の差異あるを認める。寄生生活や疾患的の食物や飲料によりて蟻の社会生活が滅亡に頻するを見て、吾々は人類の社会に多大の暗示を受けるものである。獅子身中の虫の如く、自体を知る能わざる社会の欠陥や疾患は第三者を待って始めて知ることが出来る。著者は蟻その他、社会生活を営む昆虫の経過習性を研究し、人生に対する暗示、頂門の一針となるべきものが少なくないのを見、爰に聊か本編を草した訳である。

松村松年『虫の社会生活』より、詳細は4頁から

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼



尾瀬国立公園、田代山ハイキング

尾瀬国立公園は、福島・栃木・群馬・新潟の4県にまたがる国立公園です。2007年8月30日に日光国立公園から尾瀬地域を分割し、会津駒ケ岳、田代山、帝釈山など周辺地域を編入する形で指定されました。釧路湿原国立公園以来20年ぶりに新設された29番目の国立公園です。群馬県に接して栃木県側に広がる鬼怒沼は日光国立公園にとどまり、栃木県に接して福島県側に広がる田代山湿原は新たに尾瀬国立公園に編入された形です。

日光国立公園はいわば山岳・湖沼・滝や渓谷を誇る国立公園、尾瀬国立公園は広大な高層湿原を誇る国立公園といえるでしょうか。

今回は道路事情の安定している会津側のルートを取り、湯ノ花温泉から田代山林道を進んで猿倉登山口に車を置き、田代山頂および湿原を散策し、同じ道を戻ってきたいと思います。山頂まで1時間45分、とありますのでのんびり歩きたいと思います。



日 時：9月13日（日）AM5:00 北小西門集合

行 程：鹿沼（北小）5:10——土沢 IC——今市 IC・

セブンイレブン 5:50——山王峠——会津高原駅

——湯ノ花温泉——猿倉登山口（標高 1390m）8:00……（15分）

水場……（60分）小田代湿原……（20分）田代山湿原入口……

（10分）田代山（標高 1926m）……（15分）田代山避難小屋

……猿倉登山口——湯ノ花温泉——今市 IC——土沢 IC——鹿沼

服 装：防寒具、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、懐中電灯、ストック、スパッツ、

ザックカバー、参考書（栃木の山 150）、

1/25,000 地形図は「湯西川」「帝釈山」

参加費：ガソリン代として おとな 800 円、子ども 400 円、
 今年度初参加の方は保険料 おとな 1,300 円、子ども 800 円
 （来年 3 月まで）

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）

次回予告

10月18日（日） 日光・茶ノ木平～半月山ハイキング

～中禅寺湖畔の巨樹探訪と中禅寺（立木観音：天台宗輪王寺）参詣

その他の催物案内

10月4日（日） 栃木県植物同好会主催・秋の里山植物観察（佐野市唐沢山）

10月12日（祝） 日光、外山尾根探索～^{ピーク}P 1 より内ノ外山～

11月3日（祝） 日光、雲竜溪谷探索～友知らずより雲竜瀑へのルート探索

※ 詳細は追ってお知らせします。お楽しみに。



本号の内容

山行案内	尾瀬国立公園、田代山ハイキング・・・・・・・・・・	2
次回予告	日光・茶ノ木平～半月山ハイキング・・・・・・・・・・	3
その他の催物案内	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
表紙の本	松村松年著『虫の社会生活』・・・・・・・・・・	4
活動報告・1	日光・雲竜溪谷ハイキング～コウシンソウ自生地を訪ねて～・・・・	10
活動報告・2	日光・刈込湖切込湖転じて湯ノ湖周回ハイキング・・・・・・・・・・	13
活動報告・3	太郎山ハイキング・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
活動報告・4	奥日光・森と湖のハイキング～刈込湖～・・・・・・・・・・	19
活動報告・5	北光クラブサマースクール・昆虫観察・・・・・・・・・・	22
山書談話室	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	24



松村松年著『蟲の社會生活』

(昭和8年7月22日・東京堂発行)

自序

吾々が蟻や蜂の社会生活を研究すればする程、自然と頭の下る様な行動に直面する。彼等が吾々に与うるの暗示や教訓は決して少なくない。愛隣、友誼、忍耐、努力、奮闘、相互扶助！ 人類の総ゆる美德を彼等の日常の生活に表現している。虫界に於て最も進歩せる行為を現わすものは何んと言っても蟻の社会である。然れど孤独蟻になると、本能的にしても、智慧的にしても、余程、社会を組織せる蟻に比すると、大に劣るものがある。単独の生活をなすものは互に相助け合うの機会がなく、優越せる他の行動を相模倣するの好機がない。生存競争の劇烈なる社会にありては、孤独生活は総ての方面に色々の不利がある。彼の孤独生活をなす蟻の如きは何れも社会生活をなす蟻巢に寄生せざれば、その存在が不安定である。故に今日知れある孤独蟻は何れも他巢に潜入し、その巢に養わるるものである。否、時には巢付きの女王を殺戮し己れ自身がその女王となるのであるが、それでも、職蟻の死と共にその巢は間もなく滅亡する。彼の軍隊蟻や追蟻の如き、その通路に居住する動物は、大小を問わず、仮令、虎でも獅子でも遁逃せざればその食物となるのだ。大雨や洪水の時には球形の一団となり、水上を浮び廻ることもある。小川に橋がなければ、お互に脚や腹部を啣え合って橋となし、その同僚を渡すこともある。温帯や寒帯には見られないが、熱帯に行くと蟻や白蟻や蜜蜂の活動には一驚を喫すべきものがある。殊に蟻の如きになると、独り跋扈し、暴威を振り居る様に見える。彼等には翅なきも宛然、翅のある様な敏捷振りを見せている。彼等の強きはそれ自身本来の強さよりも、その社会を組織せる団体のバックや相互扶助のお蔭である。故に単独なる場合には仇敵であっても先ず争闘することはない。群集心理は蟻に於ても依然として存在している。彼等の社会には帝王なく、命令者はない。彼等の社会には怠惰者もなく、不平者もない。故に働かざるものは食うべからずの法律も、左傾団の取締も不必要だ。彼等は朝より夕に到る迄、労働に従事し、毫も倦怠することはない。彼等にはサボタージュの本能はないのだ。彼の智聖ソロモンは「汝怠惰者よ蟻に行け」と絶叫したのも、亦この意味に於てであった。その社会の安定を計る為めには、彼等は農土を耕したり、種子を貯蔵したり、牧畜を経営する。その雑食性に進化し来った蟻の社会は、今やその食物の欠乏を訴えることはあるまい。春の食物の少ない時には越年せる小

昆虫を捕食し、夏になれば^{アブラムシ カイガラムシ ツノゼミ シジミチョウ}蚜虫や介殻虫や角蟬や小灰蝶を保護して、その分泌する甘露^{かんろ}を吸食する。秋季、果実が登熟すれば、その美味を得んとして吾々と競争する。人間と同じ様に雑食性であるが^たために人間と競争せざるを得ない。単食性の昆虫はその食物の欠乏^{かんぱつ}によりて飢餓に迫ることあるも、蟻にはそんな憂いはない。白蟻は阿弗利加にありて乾魃の際、65尺の地下に穿孔^{さくこう}して、その水を獲得し居ることが知れた。こんな場合に他の昆虫や動物にはそんな能力のなきが為め、死滅する外はない。これ蓋し^{けだ}その社会生活をなす団体行動のお蔭である。胡蜂の社会にありては未だ蟻の如く^{いま}発達していないが、それでも時の経過と共に益々蟻とその歩武^{ほぶ}を争う時代が来るだろう。胡蜂の本能は弾力性に富み、今や肉商の店頭^{とうしよく}に潜入してその肉を盗食することを覚えた。彼の中米に産する無毒蜜蜂^{ろう}は樹脂や新芽^{しんが}や臘質物を採集することを中止し、今や石油の吸食によりて、其臘を製造することを覚えた。これ等社会性の昆虫に時さえ与うれば、彼等は無限に進化し行くに違いない。昆虫にしても、他動物にしても、社会に適応したものが成功し、適応せざるものが滅亡して行く。流転は自然界の法則であって、それは永遠に進み行く。現代はその流転の一断面であり、それは過去や将来に見られない一断面である。彼の寒帯の丸花蜂は寒気の為めに今も猶、その孤独生活を続け、社会を組織することを知らない。温带にありては花蜂や長脚蜂や胡蜂の巢は1年性であるが、熱帯に行くとその巢は永遠に続く。これなればその造巢の為めの労力を転嫁^{しゅうちゅう}して、主として食物の採集に集注^{しゅうちゅう}することが出来る。これなればその食物の欠乏を訴えることは先ずない。昆虫の活動は何んと言っても熱帯に於て最も昇華している。

社会生活をなす昆虫、殊に蟻の社会には相互扶助その他、色々の美德が行われている代りに、無能なる蟻や交尾後の雄蟻に対しては何等の仮借^{かしゃく}なく犠牲的の制裁が加えられている。社会の秩序を乱す様な、例えば、飢えたる仲間^{なんら}に食物を与えない様な我利者があれば、他の職蟻によりて何んの容赦なく殺されて仕舞う。蟻の1匹や2匹の死はその社会の消長に何等の関係はなく、これが為めに人道や慈善問題は蟻の社会にては余り考慮^{なんら}されていない。否、彼等は巢の継続の為に活動する生きたロボットだ。その生殖の能力を有するものは女王と王の外にはない。其巢の大部を占むるものは生殖の能力なき職蟻であって、其活動の能力は何れも同等である。これなれば共産制度は確^{たしか}に成立する。社会の全員が生殖の能力を有する様になれば到底、共産制度は成立しない。蓋し、その生殖の能力が同一でなく、随^{たいてい}てその摂食の度も亦異なっている。その生殖欲なき蟻や蜜蜂や胡蜂の職虫には食欲^{けだ}しないから、そのアルコール的や阿片的飲料^{ふけ}に耽るものが少なくない。彼等は

これが為めにアルコール含有の飲料を与えれば、幾等も誘引することが出来る。蟻巢に共棲する好蟻動物の大部は黄金色の毛塊を有して、これよりアルコール的の飲料を分泌して蟻に供給している。其飲料は軀て蟻の社会を滅亡に誘致する民族的の毒物である。これが為めに、蟻学者エッセリには蟻の相好生活は蟻にとり一種の社会的疾患であると云っている。殊に蟻がロメークサの様な甲虫の分泌液に陶醉している間に、その甲虫の子供が蟻の子供の血液を吸収し、遂に片輪にならしむる。その子供は不完全なる發育をなすが為め、所謂擬雌(Pseudogynes)と称する畸形児となる。これは頭部と腹部とは職蟻に似ているが、胸部だけは女王に類し、その性質は怯懦であり、怠惰であり、実際はその社会に何等の用をなさない。こんな寄生的のものが2割も現われ来ると、その蟻の社会を滅亡せしむる。その麻醉的の食欲の為めに蟻はその子供を犠牲にすることが少なくない。彼の小灰蝶の幼虫は蟻の嗜好する甘露を分泌するが為め、彼等に愛撫せらるることは蓋し当然である。されどその子供をその蟻の幼虫に提供する本能の倒錯は如何にも不可解である。ロメークサの親がその甘露を分泌するが為め、その子供を保護するの本能は頗る合理的であるが、それでも、その子供の為めに蟻の子供が吸血せられて、畸形児となるのであるから、これも本能の犠牲と見る外はない。



蟻や白蟻や蜂の巢は正に数学者を驚かし、建築家を驚嘆せしむるのだ。彼の有名なる巴里のエッフェル塔は其高さ1000フィートであって、その建築家の187倍に当るが、白蟻の1丈6呎の塔は、その建築者の1000倍に当る。この割合で行くと白蟻の1丈6呎の塔は5000呎に相当する。阿弗利加に散在する白蟻の塔は堅牢であって、狩獵家が能くその頂上に昇り、周囲を望観するのである。これは容易に破壊することなく、往々土人の穴庫や墓穴に利用せられている。蟻の広き巢になると、その長さ10間に到るものもある。その構造の合理的なる、経済的なる、吾々には絶好の研究問題を供提して呉れる。目を転じて一般の生物界を見れば、生物は何れも生れ成長し、生殖し、而して死する四つの過程を繰り返して居る。これが為めには親は母性愛を現わし、生命を賭してその子孫の永続を心掛けて居る。自然界の現象にして、この原則に違反するものは何処にもない。下は単細胞の原形生物より、上は最高の人間に到る迄、何れもが同じ統一せる使命の下に活動している様に思える。進化学論者は総て生物は植物であれ、動物であれ、単細胞より発達し来ったものなれば、その統一せる生活様式を有するのは当然であると言う。然かもその種類の千変万化なるにも係わらず、総てが最も適當せる生活振りを現わし居るから不思議である。彼等は云う、地球上の生存に適當せるものが生き残り、不適當なるものが絶滅したのだ

と。或は然らん、然かもその生物の起原^{きげん}は不明であり、その存在の目的も亦不明である。その進化は無限であり、人間の如きも、その前途は洋々として、神に達せずんば止まざらんとしている。何れの生物も時と場所とを与うれば益々進化し、益々繁栄すべき素質を多分に所有している。その単独の生活をなすものより社会生活をなすものに到る迄、色々の階段はあるが、その集団的の生活をなすものは更に一層進化の度が強く、孤独の生活をなすものはその進化の度が遅く、今も猶依然として本能に束縛せられている。天幕蛄蜥は共同してその巢を造り、移転する時は先頭者に指導せられて適当なる場所に行く。群居せる飛蝗はその同類の犠牲によりて小川を渡ることもある。相互扶助の第一歩は群生の昆虫に始まり、社会生活の昆虫によりて稍々完全の域に達している。蝸牛は群居して越年するが為めに暖氣を得るに便がある。同様にエゾシロチョウの幼虫も群居して草樹の梢上に巢を張り越年している。狼でも山犬でも一匹なれば左程^{どうもう}獰猛なるものではないが、群居すると凶暴性を現わし、牛馬を屠^{ほふ}ることもある。梨の葉捲虫は共同して堅牢なる巢を造るが為め、外患に罹ることが少ない。孤独蜂も泥土を以て巢を造り、時に相接近して、共同の巢を造ることもある、然らばその労力に於てもその材料に於ても、大なる経済があるに違いない。高等動物の夫婦の結合は社会生活の出発点であり、その家族生活は軀^{やが}て社会生活に進み行くの道程にある。彼の丸花蜂の幼稚なる社会生活は軀て蜜蜂の如き複雑なる社会生活に移り行くであろう。大工蜂の単独生活も時を与うれば丸花蜂の様に社会生活の第一線に進み行くであろう。

著者はこの進化し行く生物界に、社会生活をなす昆虫が最も高級の地位を占め、孤独生活をなすものが最も低級の地位に置かれるのを見るのである。人間の社会にありても、孤独生活をなすものと、団体的の生活をなすものとの間には多大の差異あるを認める。寄生生活や疾患的の食物や飲料によりて蟻の社会生活が滅亡に頻するを見て、吾々は人類の社会に多大の暗示を受くるものである。獅子身中の虫の如く、自体を知る能わざる社会の欠陥や疾患は第三者を待って始めて知ることが出来る。著者は蟻その他、社会生活を営む昆虫の経過習性を研究し、人生に対する暗示、頂門の一針となるべきものが少なくないのを見、爰に聊か本編を草した訳である。而してこの書を編纂するに当りフォレル、エッシャーヒ、ホイーラ、ラクデン、ワード、トムソン、ピショップ、ダンメルマン、ファイフエ、エドワーズ等の諸先輩の著書に負う所が少なからざれば爰に公表する。

昭和8年7月

著 者 識

松村松年・人物紹介と主要著書

まつむら しょうねん、1872（明治5）年3月5日（旧4月12日）～1960（昭和35）年11月7日、日本の昆虫学者。和名の整理をするなど、日本の近代昆虫学の基礎を築いた。北海道大学名誉教授。理学博士、農学博士。

兵庫県明石郡大明石町（現在の明石市）出身。同志社英和学校予備校、明治学院英和予備校を経て、1888（明治21）年1月札幌農学校に入学、当初は工科で学ぶが昆虫学を志し農科に移る。1895（明治28）年卒業、翌年同校助教授に就任。1899



（明治32）年5月からドイツ・ベルリン大学やブダペストに留学し、1902（明治35）年10月帰国、札幌農学校教授となる。日本で初めて札幌農学校に開講された昆虫学講座（現在の北海道大学農学部昆虫体系学教室）を担当。1903（明治36）年理学博士。1907（明治40）年東北帝国大学札幌農科大学、1918（大正7）年北海道帝国大学農科大学へと移行、その間教授職を務め、1934（昭和9）年に定年退官するまで昆虫学教室を主宰、昆虫の分類研究に邁進し、収集した昆虫標本は数十万点に及ぶといわれる。1919（大正8）年農学博士。1934年退官後北海道帝国大学名誉教授。1947（昭和22）年まで日本昆虫学会会長を務める（1935、40、43～46）。1950（昭和25）年学士院会員、1954（昭和29）年文化功労者、1959（昭和34）年明石市名誉市民、1960（昭和35）年勲一等瑞宝章受章。

『日本昆虫学』裳華房、1898（初版）－1907（10版）…※1

『日本千虫図解』（『正編』）全4巻、警醒社、1904－1907…※2

『昆虫分類学』警醒社、1907－1915

『続日本千虫図解』（『続編』）全4巻、警醒社書店、1909－12…※2

『大日本害虫全書』六盟館、1910－1915

『新日本千虫図解』（『新編』）全4巻、警醒社書店、1913－1921…※2

『日本通俗昆虫図説』全5巻（彩色）、春陽堂教育図書出版部、

1929－1933

『日本昆虫大図鑑』刀江書院、1931



『大日本害虫図説』明治図書、1932

『復刻日本昆虫学』(小西正泰解説)サイエンティスト社、1984

※1『日本昆虫学』…日本人による最初の昆虫学テキスト。江戸時代後半以来多くの種が記載されてきた「虫譜」(虫類図譜、虫類—現代の昆虫より広い範囲を含めた“虫”—の名称や採集場所などの記録と、写生した図をまとめたもの)は、虫の名前の付け方がばらばらであり、欧米からの近代昆虫学が輸入されると、個々の虫に万国共通である学名と、統一的・体系的な日本語の名称が要求されるようになった。松村は日本産昆虫 700 種余りについて、欧米の研究者に標本を送って学名を同定してもらい(一部は松村自ら同定)、和名学名併記で、初めて体系的に示した。学名の判明した昆虫の日本語での名称(和名)は、基本的には、その種が属する科名(または亜科名、属名等)を接尾語に、接頭語として形態や色彩、生態、寄主の名称、産地名、人名などを形容的につける形(例えば「もんしろてふ」=紋の白い[接頭語] チョウ [接尾語])。現在も、昆虫類の標準和名の付け方には、原則としてこの「接頭語+接尾語」の方法が用いられている。本書は大変に好評を博し、明治 40 (1907) 年発行の第 10 版まで版を重ねた。本書を執筆したときの松村の年齢は弱冠 26 歳!

※2『日本千虫図解』シリーズ(全 12 巻)…日本産の主要な昆虫を図と文により示し、種名を調べる(=同定)便宜をはかるべく刊行。『正編』『続編』『新編』の 3 編からなる。これらの図版の図はすべてモノクロの全形背面図。松年の長兄で昆虫の造詣が深い画家である竹夫による描画と、次兄で高名な宗教家(キリスト教)の介石による学資の一部援助や懇意な警醒社書店(東京)への紹介、と松村三兄弟の合作ともいえる。『正編』構想当時、日本産の昆虫をおよそ「三万余」種と推定し、その代表的なものを図示して「千虫」に収めようとしたが、進行の途中で当初の計画がふくらみ、『続編』および『新編』へと拡大して合計約 3000 種に達した。

その後も種々の図説・図鑑を相次いで出版している。

参考: 国立科学博物館ニュース第 373 号、ウィキペディア、他



『面白き蟲界の教材』
昭和 3 年 10 月、東京堂

日光・雲竜溪谷ハイキング
～コウシンソウ自生地を訪ねて～
6月7日（日） 天気：はれ

山行案内 稲荷川林道を最奥部まで歩き、コウシンソウの在処を探します。雲竜溪谷の崖の小さな岩棚に生えているはずです。もちろん、その他にも見たことのない植物が見つかるかも知れません。稲荷川本流も友知らず付近を探索してみましょう。雲竜瀑へは滝があって直接進むことができませんが、左岸（上流を見て右手）の斜面を巻いて雲竜瀑に達することができます。ここから本流に降りることができますが、かつてあった胎内瀑（岩に覆われた内部に滝があった）はすでに流されてしまったとか。めずらしい小鳥のさえずりも聞こえるかもしれません。落石の危険がありますので必ずヘルメットを用意して下さい。

黒岩、女峰山、赤薙山に囲まれた旧火口に降った雨は雲竜溪谷に集まり、稲荷川となって山内の下で大谷川に合流します。かつて度々氾濫し、合流地点付近の集落に大きな被害をもたらしました。日光の世界遺産の集中する山内は大谷川とそこに合流する稲荷川に挟まれ、この二つの川によって、対岸と隔絶した地形となっていて敵の進入を防いでいるように考えられます。

雲竜溪谷は地図を見ただけでも特殊な自然環境であることがうかがわれ、珍しい植物があるに違いない、という期待をもって出掛けました。

神橋の突き当たりを右に曲がり、稲荷川にかかる橋を渡らずに左折します。滝尾古道に平行して走り、滝尾神社を左に見送ると林道はさらに続いています。

ゲートの手前に駐車スペースがあって、ここに車を置いて出発。この林道の最奥部が、ある珍しい植物の自生地なのです。

最初からツルガシワ、アカメヤナギといった初めて見る植物にも出会いました。さらに洞門岩という友知らず入口近くになると、タニギキョウ、オオヤマフスマ、クワガタソウといった深山らしい植物が登場。コマドリ、ジュウイチ、マミジロといった野鳥の声が聞こえるのも、この深い谷を中心とした特殊な自然環境ならではのことなのでしょうね。

洞門岩から林道は蛇行を繰り返す急登となるものの、美しい森の中を進みます。沢に出て林道は終点のように見えました



雲竜瀑



が、さらに藪に覆われた林道が続いています。大きな岩場が現れ、その岩場の下を右に巻くように土砂で半ば埋もれた林道を、岩場に生えた植物を観察しながら進みます。足元にはユキワリソウというサクラソウの仲間の花が咲いています。他に何も生えていない湿った岩壁の小さな岩棚

の上に、やっとコウシンソウのS字形の花茎が見えました。花茎の先端にはなにも付いておらず、花の季節を過ぎてしまったようです。それでもユキワリソウやウスユキソウを見られたのは、コウシンソウの次の季節になっていたから、と考えると、それぞれの地域、それぞれの季節、10日とか2週間といった周期で花の種類も変化しているのかもしれません。



✿ 参加者

石崎隆史・裕子、阿部瑞穂・良司（計4名）

✿ 見た植物

（樹木）アオダモ、アサノハカエデ、イタヤカエデ、

ウリハダカエデ、オオイタヤメイゲツ、カジカエデ、クマシデ、ハリギリ

コゴメウツギ、サワグルミ、サワフタギ、ダンコウバイ、ツノハシバミ、ノリウツギ、

ハリギリ、フサザクラ、ミズキ、リョウブ、ヤマツツジ、ヤマハンノキ

（草の花）オオヤマフスマ、クルマムグラ、クワガタソウ、ジシバリ、タニギキョウ、

ツルガシワ、フタリスズカ、ミツバツチグリ、ヤマハタザオ、ユキワリソウ

（木の花）アカメヤナギ、コアジサイ、ニシキウツギ、ノイバラ、ヒメウツギ、ヤブデマリ

（草）イケマ、コウシンソウ、サワギク、ダイヤモンドソウ、テンニンソウ

✿ 見た・聞こえた鳥

アカハラ、エゾムシクイ、オオルリ、カケス、

キビタキ、コゲラ、コマドリ、シジュウカラ、

ジュウイチ、センダイムシクイ、ツツドリ、トビ、

ホトトギス、マミジロ



コウシンソウの花は
残念ながらほぼ終わっていた

✿ 鳴いていた虫

エソハルゼミ

✿ 雲竜溪谷植物・昆虫図鑑



クルマムグラ



ヤブデマリ



ミツバツチグリ



ヤグルマソウ (葉)



オオヤマフスマ



マユミ



タニギキョウ



ミヤママタタビ



ユキワリソウ



ツルガシワ



アカメヤナギ(花)



キンモンガ



???ガ



イケマの葉の上の
ジュウジナガカメムシ

日光・刈込湖切込湖転じて 湯ノ湖周回ハイキング

6月21日（日） 天気・くもり

前の週の栃木県植物同好会主催「日光・湯ノ湖湖畔観察」に参加して大いに触発され、当初予定の「日光・刈込湖切込湖ハイキング」に参加申込みがなかったのと天候の不順に乗じて予定を変更し、内輪のメンバーで、湯ノ湖に突き出た兎島という半島部の観察を中心に簡略化した短時間コースで出かけてみることにしました。

湯元に車を止め、湖畔に出て、車道沿いに湖畔を南下、歩道はあるが通る人も少ない兎島の森閑とした道を、珍しい植物を探しながら歩き、湯滝上からは湖畔周回の道をたどります。

湯ノ湖は折しも釣りのシーズン真っ最中、ボートハウスの特設テントに人が群がり、湖水もかなり沖まで釣り人が入ったりボートを浮かべたりで賑わっていますが、原生林の縁をなす岸辺の道は行き交う人も疎らで至って静か、咲く花は多くはないが生命の小さな息吹を拾いながらのんびり歩を進めます。ほぼ1周して湯元に戻ってきたところで渡った川辺に、クリンソウが色とりどりに咲いていました。



湖畔でさてお昼ごはん、と思ったところで雨が降り出し、そそくさと食べ終えて引き上げます。途中で雨宿りがてらビジターセンターに寄って、改めてこの辺の自然環境について概観。職員との雑談で、男体山が仕切りになってその両側で天気が全く違う、と聞きました。なるほど、この後通った中禅寺湖畔は好天、しかしいろは坂を下って行くところでまた雨になりました。

参加者

石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計4名）

見た植物

（針葉樹）アスナロ、イチイ、クロビ、コメツガ

（落葉樹）アサノハカエデ、ウリハダカエデ、オオイタヤメイゲツ、オオカメノキ、オオヤマザクラ、オガラバナ、シウリザクラ、ズミ、ツタウルシ、ツルアジサイ、



↑白やピンクのクリンソウ

トウゴクミツバツツジ、ナナカマド、ニシキギ、ニワトコ、ハリギリ、ハルニレ、
ヒロハカツラ、マユミ、ミネザクラ、ヤハズハンノキ、ヤマハンノキ

(草の花) イチヨウラン (右写真)、イヌスギナ、オオヤマフスマ、
クリンソウ、クルマムグラ、ショウブ、シロツメクサ、
シロバナノヘビイチゴ、ズダクシュ、ヘビイチゴ、
マイヅルソウ、ムラサキサギゴケ、ヤマハタザオ

(木の花) キバナウツギ、サラサドウダン、ツルウメモドキ、
ニシキウツギ、ミヤママタタビ、レンゲツツジ



✿ 見た・聞こえた鳥

ウグイス、カッコウ、キセキレイ、キビタキ、コゲラ、センダイムシクイ、ノビタキ、
ホトトギス

✿ 初夏の湯ノ湖写真集



↑湯ノ湖畔の湿地で見たショウブの花穂
ツクシとスギナが合体したようなイヌスギナ(有毒!) ↑



↑湯ノ湖畔
←イタドリハムシ
↓対岸から見た湖水
 兎島へ向かう遊歩道→

北岸のミズナラの原生林へ
 キバナウツギ↓



太郎山ハイキング

7月12日（日） 天気・くもり

この日の太郎山は、今年最も期待していた山行だったのに、報告も書かぬままもう8月も終わり。お盆明けから秋の気配となり、なつかしい夏の思い出となってしまったけれど、今でもひっそり咲いていた草花や、山頂から見えた山々の一つ一つが走馬灯のように僕の脳裏にうかんでは消えるのである。

元鹿沼市教育長の西山義信氏は76歳。現在でも剣道の指導者として活躍されており、東奔西走の日々である。本会の会員になっておられるが、山行にはなかなか参加できない。この日も別の予定が入っており、特に残念がっておられた。ところが前日になって、別の用件はキャンセルしたから、太郎山に行く、というのである。日本百名山の男体山にも登ったことのない先生が参加されるという。太郎山という山、しかも7月初旬という季節。天気は晴れ。その良さを先生は認識されているに違いないのである。

土沢から日光宇都宮道路に入って清滝へ。ICから出た所にあるファミリーマートで父上へ送ってきてもらった佐々木伸二君（日光東中1年）と合流し、奥日光へ車を走らせる。志津林道に入って後方から来た車を先に送ると、追い越しぎわに、「太郎山に行くなら、車は堰堤の所に置くといいよ」とご教示下さる。志津小屋手前で左折して太郎山に向かうが、道の状態が不安で、小さな堰堤もあるので、一昨年の太郎山行と同じ場所に車を置いて歩き始めることにした。ここには確か小さいけれどオオバボダイジュがあったはずだ。

間もなく大きな堰堤が現われて前後に数台の車が駐車してある。林道はさらに続いているが、そのすぐ先が登山口である。登り始めは薄暗い森林で、登りのときは気が付かなかったけれど巨樹が多く、直径1mを超すウラジロモミもある。しばらくはなだらかな森の中を行く。近くでクロツグミかな、と思うほど変化のある、たぶんアカハラの声。

“キョロン、キョロロ、チリリン”

その先から道はほぼ新薙の左岸に付けられた道を行く。例年ならこの辺り、6月初旬に咲くアズマシャクナゲが満開で、白い大きな蕾さえたたくさんある。ハクサンシャクナゲとの違いも、調べておかないと。



これから登る太郎山の山容

新薙を出ると、これから登る太郎山が雄大な姿を現わした。道はしだいに急になってきて、ブナのような白っぽい樹皮の目立つ針葉樹、シラビソの森となってくる。足元



男三人、山頂を極める

には真っ白い頭をもたげた小びとのようなギンリョウソウ、可愛いゴゼンタチバナ、ひかえめに咲くマイツルソウなど。すでに花期を過ぎてしまったイワカガミが出てくると、いよいよ高山にきたな、と胸が高鳴る。

道は左に折れて新薙の2つのガレ場を横断し、森の中を進むと、まもなく針葉樹の森の先に、明るい草原が見えてきた。「お花畑」とよばれているのは、もともとは湿原で、おそらく昔は色々な高山植物の花が咲きほこっていたからであろう。木道も設置されぬまま踏み荒らされ、10年程前には小学校の校庭のような平地で何も生えておらず、所々に浮島の名残りがあってツツジ科の小さな植物がたくさん生えていたが、今はその浮島もなくなって、広々とした笹原になっている。それでもハクサンチドリが2輪ほどあってなくさめられる。再び森林に入ると、道は垂直に立つ大きな岩の間を進む。岩の下には小さな石仏が安置されている。

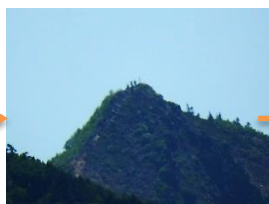
まだ咲き残っていたイワカガミやミツバオウレンの白い花を見ながら、ついに山頂に到着。山頂にはすでに20人程の登山者が樹木のある日陰を占領している。

似てはいいないが人にはおじいちゃんがせがれと孫を連れて登ってきた、と思われそうな3人はお祝いの握手をして写真を撮った。それにしてもよくぞ、1人も遅れることなく、3人そろって登頂できたものだ。小生の登りの遅さもあるものの、やはり西山先生の息も荒げず、静かに登り続けられるその姿勢と体力に、頭の下がる思いである。まだ伸二君も、会うたびに心身共に成長され、小生の細い目が驚きで円くなってしまうこと度々であった。

この日、南西側は薄く霧がかかって富士山は見えなかったものの、北西側は遠くまで山並みを見ることができ、上越国境、及び会津の山々、その辺りに集中する日本百名山、皇海山、奥白根山、至仏山、平ヶ岳、越後駒ヶ岳、燧ヶ岳、会津駒ヶ岳など、眺望することができた。コニーデ型で地形的変化のない男体山やシカの食害が際立つ奥白根山は植物観察地としては魅力が薄れてしまったが、太郎山は小太郎山とをつなぐ稜線やお花畑の存在など変化が多く、植物の種類は多い。帝釈山や赤薙山、前女峰山などをし



左、帝釈山、右、女峰山



女峰山

山頂付近に人影が…→



たがえ、懷に雲竜溪谷を抱える女峰山も同じである。西山氏の発した言葉におどろいた。
「この次は女峰山だな。」

山頂は西側が崖になっていて崩れており、山頂台地は少しずつ蝕まれているようである。しかしその上部にはミヤマダイコンソウがしがみついて、黄色い可愛い花を咲かせている。

ここまでで満足だ、と思っていたら、伸二君が、昨年山王帽子山を越えて登った小太郎まで行ってみましょうという。太郎、小太郎間の稜線上にも何かあるかもしれない、と勇んで出発。結構標高差のある切戸（クレット）ではあったが難なく小太郎に到着。ツマトリソウ、ウスユキソウ、コケモモ、ウラジロヨウラク、マルバシモツケ、イワオトギリは、この稜線上でのみ見ることができた。お花畑を見下ろすことができたのも良かった。

帰りは同じ道を下ったが、行けども行けども道は続き、よくぞこんなに登ってきたものだと、思うことしばしばであった。

林道に出て再び握手。車を置いた所でオオバボダイジュの手に届く所にあったはずの枝を探したが見当たらない。双眼鏡ではるか高いところに見える枝を見てみたら、オオバボダイジュらしい。その枝から、幹を伝って行ったら、道路の山側に、直径1mを超えそうな大木が見つかった。

三本松で休憩し、西山氏にソフトクリームをご馳走になり、帰路についた。

来年は女峰山ですね、西山先生！



元・お花畑にてひと休み

✿ 参加者

佐々木伸二、西山義信、阿部良司（計3名）



樹林帯の中の
小さな石仏

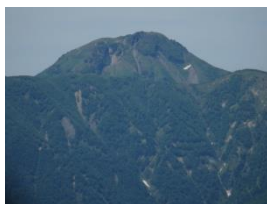
✿ 見た植物

（針葉樹）ウラジロモミ、カラマツ、コメツガ、シラビソ

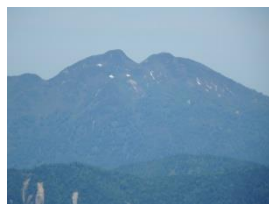
（広葉樹）アズマシャクナゲ、ウラジロカンバ、ウラジロヨウラク、ウリハダカエデ、
オオバボダイジュ、オガラバナ、カツラ、コメツツジ、サウグルミ、ズミ、ダケカンバ、



会津駒ヶ岳



奥白根山



燧ヶ岳

ナナカマド、バイカウツギ、ハリギリ、ベニサラサドウダン、
ミネカエデ、ミヤマザクラ、ミヤマハンノキ、ヤハズハンノキ、
ヤマハンノキ

(咲いていた花) アズマシャクナゲ、イワオトギリ、イワカガミ、
ウスユキソウ、ウラジロヨウラク、ギンリョウソウ、コケモモ、
ゴゼンタチバナ、コメツツジ、シラネニンジン、ツマトリソウ、
バイカウツギ、ハクサンシャクナゲ、ハクサンチドリ、
マイヅルソウ、マルバシモツケ、ミツバオウレン、
ミヤマダイコンソウ、ヤマニガナ、



ウラジロモミ



シラビソ



見た・聞こえた鳥

アカハラ、ウソ、エゾムシクイ、コガラ、コマドリ、ホシガラス、
ミソサザイ、メボソムシクイ、ルリビタキ



太郎山植物図鑑



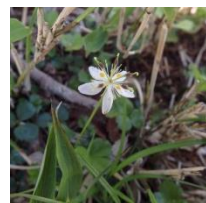
アズマシャクナゲ



ゴゼンタチバナ



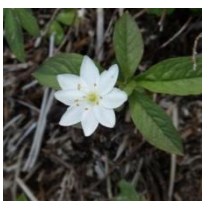
ハクサンチドリ



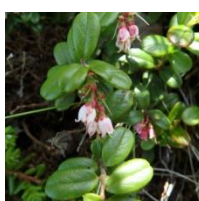
ミツバオウレン



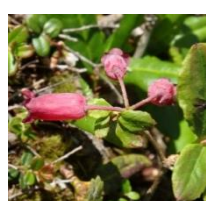
ミヤマダイコンソウ



ツマトリソウ



コケモモ



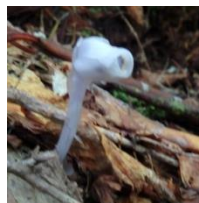
ウラジロヨウラク



マルバシモツケ



イワオトギリ



ギンリョウソウ



イチヤクソウ

奥日光・森と湖のハイキング～刈込湖～

7月19日（日） 天気・くもり一時晴れ

梅雨明け前から酷暑の続く中、標高 1400mを超える湯ノ湖からさらに高所をめざすハイキングに、爽やかな高原歩きを期待して出かけました。北小からの新しい顔ぶれにゲストも加わって総勢 16 名、久々に賑やかな山行です。

山並みの背後に立ち上がる灰色の雲に天気が案じられ、とにかく見どころの多い刈込湖までは行ってみようと、湯ノ湖畔やうみノ湖を端折って湯ノ平湿原から山道に入ります。天気はどうやら持ち、にわかに日が差せばかえって暑苦しいくらいの山歩きでした。

巨樹や初見のコキンレイカなどに感動しながら道を進んで、山に囲まれて湖水の広がる刈込湖畔に到着、その眺めも味わいの一つとして水辺の昼食タイムを楽しみ、来た道を引き返しました。

湯ノ湖を背景に温泉施設と湿原の広がる湯元に戻って来ると、日差しはいよいよ強く、それでも風は高原の爽やかさ。足湯をしばし楽しみました。その後光徳牧場にも寄って、ごほうびアイスです。



帰りの車に乗り込む頃から急に雨が降り始め、戦場ヶ原あたりでは一時視界不良になるほどの降りでしたが、局地的なものだったらしく、二荒山神社での小休止に境内で出会った、男体山から下山して来る人たちに雨に遭った様子は見られませんでした。たくましい山男、山女たちが上気した顔で次々鳥居をくぐって帰って行きました。

その後も時々雨に遭いながら、乾いた鹿沼の街に帰り着きました。

参加者

北川桃子・英子、佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、
祝 純子、小島美穂、高山公男・良恵、名塚孝子、西山弓子、
石崎裕子、阿部良司・みゆき（計 16 名）

見た植物

（針葉樹）アスナロ、カラマツ、クロビ、コメツガ、シラビソ、
（落葉樹）ハレニレ、ヒロハカツラ、マユミ、ミズナラ、



クロビ

(木の花) ノリウツギ

(草の花) イチャクソウ、イトキンボウゲ、オトギリソウ、
コキンレイカ、ギンリョウソウ、サワギク、シロバナノヘビイチゴ、
ズダヤクシュ、ノコギリソウ、ミヤマカラマツ、
エソノヨツバムグラ



カツラ



見た・聞こえた鳥

ウグイス、キビタキ、コマドリ、ホトトギス、ミソサザイ、メボソムシクイ、ルリビタキ



刈込湖写真集



湯元駐車場に車を置いて出発



輪王寺の塔頭のひとつ温泉寺



湯ノ平湿原を通過して登山口へ



アスナロなどの大木がある



小峠でひと休み



ここでコキンレイカを見る



気持ちのよい刈込湖畔



エソノヨツバムグラ



イワオトギリソウ



イチャクソウ



ギンリョウソウ



ノコギリソウ



←湯元温泉の
無料足湯
「あんよのゆ」

三本松から見た
男体山→



↑中禅寺湖畔の二荒山神社
男体山から登山者が次々意気揚々と下りてくる

※ 参加者からいただいたおたり

台風11号が去り好天と喜んで参加した切込湖刈込湖へのハイキング。小学3年生から70代の私が最高齢だろうなあ…15, 6人のグループ。

湯元の駐車場に着くや北の空に低く黒い雲が降りて来ている不安を感じながら出発した。

久しぶりにこの山道に入ったが、こんなに上り下りがあったかなと思いながら短い足をもち上げ、急な階段を降り刈込湖に着いた。山から来る清々しい空気を感じ、枯木に腰かけた。サアツと涼しい風とともに小雨になったがすぐ止んだ。

こでゆっくり休み昼食をとった。

昼食後、阿部さんが少年に戻ったように水中動物を探しに夢中になっていた。小さな蛙にお子様達は大喜びで走り回っていた。

しばらく皆でそれを見ていたが、ふと私の足元に目をやり、阿部さんの奥様と「こんな小さい可愛い花が咲いているんですね。」と、2人でしゃがみこんでよく見ると、茎がずーっと這いめぐってその先に小さい黄色い花を咲かせていた。

家に帰ってから夫にコキンレイカ、ミヤマカラマツソウが咲いていた話をしたら、「刈込湖には絶滅危惧種のイトキンボウゲがある筈だ。小さい黄色い花。」と言われてアツと思い出した。あの時見ていた花だと気づいた。この地には何度も来ているが、山道に沿って歩くだけだった。こでゆっくりできたから出会えた花だったのだと嬉しくなった。

グループの人たちとも自然に親しくなりとても気さくな人達だった。

湯元へ戻ることになった。帰りは足湯に入り、光徳でアイスクリームを食べ解散になった。

時間にとらわれない気ままなハイキングで楽しい1日を過ごさせていただいた。(名塚孝子)



絶滅危惧種のイトキンボウゲが咲いていたなんて！

最高の注目すべき植物でした。僕も見なかったな。コキンレイカで感激していた小生とのレベルの差を感じます。次回は名塚史雄先生も一緒にご参加ください。(阿部)

北光クラブサマースクール
昆虫観察

7月26日(日) 天気・くもり

夏休みが始まって1週間、午前5時集合のためいつにない早起きですが、北小西門内に1年生から6年生までの親子 10組 21名にスタッフの面々が、昆虫との出会いに胸躍らせて集まりました。梅雨明け前からの高温が今日も予想され、暑くなる前に行って来ようと早速車を連ねて出発。

今回はまずいつもの日光市岩崎の岡部さん宅の雑木林に直行。1年生の時から参加しているという高学年の常連君もいて、うっそうとした藪に率先して踏み込んで行き、虫のいそうな木の幹を打つ木槌も積極的に振るう頼もしさを見せてくれました。小さな子もお父さんも、幹にとまっている虫を探したり、飛んで逃げようとする虫を追いかけたり、つかまえた虫を昆虫ケースに入れて見せ合ったり、林の中は大賑わいでした。今回はカブトムシが多く、ノコギリクワガタ、コクワガタも少々、ミヤマクワガタは鳥に食われたらしい死骸がいくつも落ちていました。除草作業中の岡部さんとお礼かたがた記念撮影をして、引き上げました。



その後御成橋付近の黒川河川敷のヤナギの繁る藪にも寄ってみました。度々の出水で荒れているためか、収獲はありませんでした。

希望の獲物がなかった子のために、隊長が用意していたカブトムシを分配しました。他にはカナブンやゴマダラカミキリが見られたくらいでした。

隊長から、夏休み中の親子での夜の昆虫採集のすすめと、その際に注意すべきことの説明がありました。

※ 参加者内訳

1年生1名、2年生3名、3年生2名、
4年生2名、5年生3名、6年生1名、
保護者9名(計21名)＋スタッフ3名



※ 参加者からいただいたおたより

むしをもっとつかまえたかった

むしとりがたのしかった

むしを2ひきつかまえた

くわがたがつかまえたかった

どろがふかった

(いそぎ たすく・北小1年)

先日は、昆虫観察、楽しく参加させて頂きました。

上級生から下級生まで参加してるので、上級生が率先して行動してるのも感心しました。

ただ、上級生ばかりが捕っていて下級生が直接捕える事が少なかったなので、もう少し配慮があっても良かったのでは、と思いました。

(磯木克明・保護者)

※ 昆虫採集の風景



集合してます「捕りたいもの」を発表 田んぼのへりに車を止めて、いざ出陣！ カブトムシ



へ虫のいそうな木の幹を木槌でゴンッ
↑それ落ちてきたぞ、捕まえる！
ばくも叩いてみる、エイヤッ↑

←除草作業中の岡部さん

黒川河川敷では収獲なし→



白坂正治氏からのおたよりです。

前略 先週末から梅雨の晴れ間というより猛暑の予行演習(?)のような日が続いていますね。

『月報第34号』ありがとうございました。

GWの奥多摩山行は天候が申し分なかっただけに残念だったことと存じますが、大きな感動があれば、見落としがち、忘れがちな小さな小さな感動こそ後にはじわっとくる心象の頂なのかもしれません。“天上の花園”は綺麗ですね。目の保養をさせて頂きました。この週末は台風を伴っての梅雨空になる模様。荒ぶる自然にならぬことを祈りつつ。乱筆乱文にて。

草々

7月13日



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第35号

2015年8月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

